

山室真澄さんの「宍道湖への遺言」を読んで

2020年4月16日(26日改訂)

西村二郎

私はシニアになってから、産学官連携センター・化学工学会・SCE・Netの環境研究会などの研究会に所属して活動している。最近、宍道湖の水質汚濁メカニズムとシジミ資源の回復策に関する山室プロジェクトの研究を一例として、「新領域創成科学の危うさ」と題するプレゼンをしたとき、研究会のメンバーの一人が表題の山室さんの「宍道湖への遺言」と山室さん自身がインタビューの中で紹介している「経歴」の存在を教えてくれた。

松江市出身の私にとって、宍道湖には深い思い入れがある。アオコが発生するようになった宍道湖の水質や漁獲量が減り、小粒化したシジミが気になり、調査するようになった。

島根県は宍道湖の汚濁メカニズムについて5年、シジミ資源の回復策に関して6年、山室真澄東大教授を座長とする委員会に調査を委嘱していた。報告書はそれぞれ、2014年8月、2018年3月に公表された。私は両方とも読んだ。そして、推論の方法が粗いと思った。問題を解決しようとする使命感も感じられなかった。アオコが大発生した2012年に最低の1700トンだったシジミの漁獲量が事実上アオコフリーとなった2013年以降4000トン台まで回復したことを、山室教授は委員会の功績の如く宣伝しているが委員会は何もしていない。アオコが発生しなかったお陰だ。この大きな状況変化にろくにメスも入れずアオコの発生原因は夏季の低塩分濃度・高水温のせい、と切り捨てた。そしてシジミ資源回復としては塩分濃度を上げるべきだが、人為的には不可能なので、委員会が作ったシミュレーションプログラムで将来の資源量を予測し、現在の漁獲量を決めるべきとした。二つのプロジェクトは失敗に終わった、と言うしかない。このような場合、最大の責任はプロマネにある。私は山室教授のプロマネとしての資質に疑問を持った。

何故、山室さんが宍道湖のことに関して、絶大な影響力を持つようになったか、「経歴」から読み解ける。彼女が宍道湖と取り組むようになったきっかけは、宍道湖淡水化計画が中断されたとき、宍道湖の環境アセスメントの是非に関する検討を県から依頼されていた西村肇東大化学工学科教授の「密命」を帯びて松江に行ったとある（この表現は山室さんの選民意識のせいと見るべきである。人格者の西村教授にはそぐわないというコメントを知人から頂戴した）。そして、博士論文で、シジミの水質浄化効果を「世界で初めて」明らかにしたとも書いている。水生の動植物は、原理的には全て「COD」（「TN」や「TP」でもある）である。汚濁水の流入の他、死んだ動物や枯れた植物が腐って分解して水質を悪くする。シジミに限らず、湖沼の動植物を人がとれば水質浄化効果があるのは常識である。それはさておき、山室さんは研究成果が認められ東大の教授コースに乗った。そして宍道湖に関する研究予算を取ってくるようになった。研究者にとって、研究費を取ってくるボスは絶大な影響力を持つ。

2018年、私は島根県の研究者から送られてきた山室教授を筆頭著者とする陸水学会の報文（2016）を読んだ。素人でも分る間違った報文だった。研究論文に異議を申し立てる場合、普通は「見解の相違」で済まされる。しかし、全く論争の余地がない間違いだった。報文では、宍道湖々心の6月の表層水温と翌年のシジミ漁獲量の間回帰分析を行い、相関係数0.52を得た。そして帰無仮説が0.1%以下の危険率で棄却されるから、正の因果関係ありとした。この論法でいけば、相関係数は0.54となり、帰無仮説も同様に棄却されるので、前年のシジミ漁獲量との間にも因果関係があることになる。こんな不条理が生じるのは、相関が弱いからである。さらに、ひどいのは、

2009、10、11年の6月の水温として6月1日の水温を採用したことだ。このため、6月の水温に右肩下がりの傾向が生まれた。このようなデータの使い方を不用意に行ったらとすれば、研究者失格である。意図的に行ったらとすれば、研究の倫理にもとる行為であり、研究者失格以上である。

6月の水温は上旬<下旬である。私は6月15日正午の水温を採用してみた。右肩下がり傾向は全くなくなり、翌年のシジミ漁獲量との間には相関関係もなくなった。私はメールで誤りを指摘したが、山室教授は言を左右にして認めなかった。教授は報文が公表された2016年当時、陸水学会長、共著者のKH博士は編集委員長だった。さらに教授は、「シジミの漁獲量の回復策」に関する委員会の報告書中に出ていた、「宍道湖の流れにコリオリの力が影響する」という委員会メンバーの報告を鵜呑みにしていた。コリオリの力が影響するのは、体積に働くコリオリの力に対して、その抗力（周辺に作用する摩擦力）が無視できるほど大きな水塊（幅が数百キロ米、深さ数百米の黒潮のような海水塊）に、例えば、貿易風や偏西風が恒常的に作用して、速度が発達するからである。私が誤りを指摘した2019年1月当時、山室教授は理学部地球惑星学科の教授を兼ねていた。コリオリの力の何たるかを知らない地球惑星学科教授がいるなんて信じられない。今は大学院新領域創成科学研究科教授専任になっているようだ。私は山室教授の「基礎学力」にも疑念を抱いた。誤りの内容が余りにも初等的なので、原因として疑ったのは事故か病気による能力低下だった。

「経歴」によれば、山室さんは、文科三類（文学部、教育学部、教養学部進学コース）に入学し、三年次に理転した。教養学部（国際関係論）に落ち、欠員があった理科一類からの進学先の理学部地理学科に進学した。入試の偏差値を比較すれば、文三と理科一類では10点近い差がある。そんなことよりも本質的なのは、山室さんが、学部の二年間、理一の教養課程で学んでいないことである。彼女は熱いうちに打たれなかった鉄なのだ。このような転部制度は、教養課程の教育の意義を大学自ら否定する行為である。定められた学部以外への進学には入部試験を課すべきである。

なお、「経歴」には、37才のとき交通事故に逢い、ひどい後遺症に悩まされたとある。米国の高校を卒業した山室さんが英会話能力を失ったとのことである。その後の努力により回復はするが、元通りという訳にはいくまい。能力の衰えは、得意としている分野に関して自覚され易い。このことは、交通事故により、英会話以外の能力も毀損された可能性を示唆している。山室教授が、宍道湖に関わる二つの諮問委員会の座長を務めたのは、交通事故に逢った後である。一旦、なってしまうと、自動更新に近い「大学教授」という身分制度にも問題がある。私は妙な納得をした。

新領域を創成するという仕事は重要な研究分野である。しかし、この分野で活動する場合、まず、関連する既存領域で一家言を持てる存在になっている必要がある。山室さんの知的本籍地は何なのだろうか。新領域創成科学が、落ちこぼれ研究者の救済「領域」であってはならない。

山室さんの「宍道湖への遺言」はTwitterにある。島根県の関係者から修正を求められ、タイトルを含め3月21日に大幅に修正したとある。修正されているので、内容は知る由もないが、修正しなければならないことを書いていたということから自ら認めている。思い込みの激しい山室教授にありそうな出来事である。そして、このような状況では、宍道湖に関する研究を行うことは困難と考え、訣別した、とあった。この決着こそ、私が望んでいたことである。この件は島根県の関係者が自主性を取り戻した証しでもある。私の体験から推して溝口知事から丸山知事に代ったことも影響しているのだろう。宍道湖の水質管理と島根県の水産行政にとって歓迎すべき変化である。これを契機に島根県には「失われた11年」を取り戻し、自主前進して欲しいものである。

以上